

武蔵野日曜集会

パラクレートス

――ヨハネ伝第14章22～31節――

1968年4月21日

小池辰雄

文化的生活の原動力 聖霊がその中にやって来る パラクレートス 「対一説」 助主 聖霊が来るから新しくなる 無の場 聖霊をくらう 「如一説」

【ヨハネ14・22～31】

22 イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』²³ イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともに為ん。²⁴ 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり。』

25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、²⁶ 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。²⁷ われ平安を汝らに遣す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。²⁸ 「われ往きて汝らに來るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。²⁹ 今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとし汝らの信ぜんためなり。³⁰ 今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に對して何の權もなし。³¹ されど斯くなるは、我の、父を愛し父の命じ給うところに遵いて行うことを世の知らん為なり。起きよ、率ここを去るべし。

● 文化的生活の原動力

こないだ、この集会のビラに、

「キリストの福音がいかに人間実存の強力な源泉であり、文化的生活の原動力であり、イデオロギーを超えて真の大和を展開させる光源であることを、身をもつて知りたい人はご来会ください」

と書いた。皆さんはこの言葉をよく覚えておいていただきたい。

今日は、ヨハネ伝14章22節からです。



非常に重みのある力強い言葉です。キリストはいくら、いわゆる世の人に語ってみても、これは分かん。いや実に、「汝ら」といわれる使徒たちに語りましても、これも本当は分らない。今に分かるときがくると言う。

「私がこれから何年、君たちと一緒にいても、君たちは分かってくれないから、私は向う側に往くん。そうしたらば、必ず分かるときがやってくる。だから、私が向うに往くのを君たちは喜んでくれ」

と。まあ何という、キリストの本当の思いやりを持った、しかも非常な悲劇を越えての言葉かと思う。

ここで注目すべき言葉は、

「かつ我等その許に來りて住^{すみ}を之とともに為^せん。」

という言葉。新しい訳では、

「わたしたちはその人のところに行つて、その人と一緒に住むであろう」

と。

「住みかを一緒に作る」

というような言い方をしている。「我々は」と言っている。キリストがこの場合に、「我等」と言っておられるのは、父なる神と、自分自身即ち子と、聖霊と、この三つが、「神と子と聖霊」とが、どうも意識されているようです。その所にやつて来て一緒に住むと。いや実に彼と一緒に住みを作る。

「我々は住まいを一緒につくろう」

という言い方をしておられる。これはちょうど、ヨハネ伝1章14節のところに、

「言は肉となつて我々の間に幕屋を張る」

という言い方をしているのとちよつと似ているわけです。「エスケーノメン」という「幕屋を張る」という字です。我々の間に天幕を張る。その関係は何によるかという、愛によるのだと。愛によつてそのことが成就する。

「人もし我を愛せば」

という。しかし、福音の事態を何か新しい律法のように考えないようにしてくださいよ。決してこの福音は律法ではない。パウロはいろいろ戒めを言いますが、

「それは自然にそうなつていく」

といつて勧めているわけで、

「せよ、すべからず」

と言っているわけではない。

太陽はこの花を愛している。太陽が花を愛しているということはどういうことかという、ただ気分的に愛しているのではない。太陽は花に光を当てている。熱を与えている。

「光や熱を与えている」



ということが、

「太陽がこの自然を愛する」

という内容です。私たちが神を、キリストを愛するためには、何かそこにそういった内容がなければ愛せないんです。

キリストが私たちを愛してくれた。愛しておられる。その愛の内容はやっぱり、「生命、光、愛」というこの三つの言葉がヨハネ伝では切っても切れない関係にあります。即ち、

「生命を与えている。また、私たちに光を与えている」

それが愛の内容である。キリストの生命が来てなければ、

「愛せよ」

といったって、これは愛せないんです。キリストの光が来てなければ、これもまた愛せない。

●聖霊がその中にやって来る

こないだの復活節の時にみましたように、キリストが甦った。

「自分自身がもの凄い永遠の生命であり、霊的な生命である」

ことを彼自身が証した。^{あかし}それにぶつかって、弟子たちが目覚めた。やつと立ち上がる事ができた。まあ私たちも非常に陰惨な日からスッと太陽が出てきて明るくなると、気分が明るくなる。それと同じように、このキリストという生命に、光にでつくわしたものですから、彼らがやつと目覚めた。

「ああ、キリストは甦った」

と言って、イエスの所に走り寄るようなことに、マグダラのマリヤなんかはイエスに抱きつこうと思った。

ゲーテが『ファウスト』の「天使たちのコーラス」(79行)の中で、

「キリストは甦り給った。

朽ちゆくところの大地から。

即ち、彼自身が朽ちる現実から甦って、朽ちざる本当の現実をそこに現象せしめた。だから、

喜んでお前たちは罪と死との絆きずなの中から自分を解放せよ。

行為をもって大いに活動して彼を称賛する者たち、

また、愛をそこに証しする者

愛の証者です。行為をもって彼を称賛する者。また、彼の愛を証する者。

親しく兄弟姉妹のよつに、

人が困っていたらお腹がすいていたら、

食物を与えてやる者

旅をして教えを説く者、

喜びを約束するところの人たち、



そついった人たち、汝らにこの師匠さんは、キリストは近いぞ。

本当に彼はお前たちと共にそこにあるのだ。」

と。行為をもってまた言葉をもって、言行をもって復活のキリストの愛をそこに証するところの者。それとキリストは共にあると。

まあそう言われなくても、

「さあ、それがどの程度できるでしょうか」

という問題があるわけです。しかし、

「我等その許に來りて住処を之とともに為ん」

と。神・キリスト・聖霊というこの三位一体の神が、それと共にやって来るといふ。

「お前の中にやって来て、住みかを共にする」

と。私たちが「神」とか「父」とか言いましても、直ちにそれはキリストをそこに具体的に意識するわけです。また、そのキリストがいつまでもただ対者であつてはしょうがないので、キリストと一つになるためには、どうしても聖霊という方が――

「一緒に住む」

といつても、一番具体的なものはこの聖霊なんです――聖霊がその中にやって来る。これではじめて、

「汝らと住まいを共にする」

というようになる。

その証拠には、いくらキリストが、イエスが弟子たちと一緒に飯を食いましても、どんなに一緒に歩きましても、彼らはどうしてもキリストと一つになれなかった。私たちはこうやって親しくしているけれども、あなた方と私の親しさというものが本ものであるためには、そこに共通な――a、b、cという我々の間に共通に――霊という要素が、聖霊というものが入つてこなければ、これが本当に一つにはならない。問題はそこに焦点がかつてくるわけです。これが「愛する」といひましても、この同じものが、これは共通なものですから、みなこのP（聖霊、パラクレートス）で共通ですから、Pという共通項があるから三位一体ということなんです。今のキリスト教の焦眉の問題は、どうしても聖霊の問題です。

●パラクレートス

25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言ひしことを思い出さしむべし。

「助主」という言葉、これが「パラクレートス」です。これは「パラカレーオス」という字からくる。「パラクレートス」とは、

「それを支えるために、担うために上から自分の傍らに呼び出されたもの、味方と



して引き寄せられたもの」

という意味です。宗教改革の先駆者のジョン・ウィックリフやルターはこれを「慰め手」という訳をしていますが、これは少し意味をくみすぎたきらいもありますけれども、しかし、そういう意味がないわけではない。「パラクレートス」という字がそういう意味も持っていますから。普通は、代言者、代って言う者、即ち弁護者、代って執り成す人、代って執り成しの祈りをする者。そういうのがこの「助け主」です。

²⁶ 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、

と。御霊は非常に力強い、力あるものであると同時に、非常にまた智者、霊知を持ったものです。だから、

「私が言っていることは、今は分からないけれども、このパラクレートスが来たらば、お前たちはみんなそれが、言ったことやしたことが分かるし、思い出すだろう」

と。私は兄が亡くなる数年前に――自分で言ったらおかしいですが、兄は素晴らしいクリスチャンでありました――そのしたこと言ったことが、兄が亡くなつて私がこの信仰に入ったら、それが本当に分かつてきた。こういうわけです。

「他の人が教えるを要しない」

と、ヨハネ書簡にも書いてある。ヨハネの第一の手紙の2章27節に、

「²⁷ なんじらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、

この「ガイスト」（霊）がまた「油」でありまして、

人の汝らに物を教うる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教え、かつ真にして虚偽なし、汝等はその教えしごとく主に居るなり。」（ヨハネ一2・27）

あなた方はこの聖霊を受けますと、私の言っていることがスーッと分かつてしまう。だから、私はお説教はしない。皆さんとこの聖書を楽しんで読むだけのことはなしです。

学校というところは、教える者と教えられる者がいるけれども、この福音の世界は、教える者はこの神の言と神の霊のほかにない。なるほど、それはいわゆる聖書の研究とか何とかいつて、外側のことは学者が教えるでしょうけれども、そんなことは本当の聖書の真ん中を論ずることにはならない。だから、いつも言っているとおり、「教」ではないということ。

この集会に来ている人は、絶対にこのパラクレートスを自分の中に受けとるまではやまずと――受けとつたらやめていいというのではないけれども――進んでいただきたい。とにかく、聖霊に触れますと、これはうれしくてしょうがないものだから、それはもう自然に進るようなお手紙をくださるわけです。

●「対一説」

まあ聖書は66巻、これは大変ですよ。これを一生懸命で研究して、

「一体、聖書は何を結局言っているんだろうか？」



とか。

「いやいや、こちらにはこう書いてある、あちらにはああ書いてある、それをどう辻褃を合わせるのだろうか？」

とか。もうみんなクリスチャンというのは普通それで疲れてしまう。そんなのではない。まあ聖書はまだいいとしても、仏教の方では大変ですよ。仏教は大蔵經一万巻という。一万巻の大蔵經を読み破つてからと言ったって、それはどうにもならない。

ある坊さんが雲門という僧に問うた。

「いかなるかこれ一代時教」

と。「二代時教」というのは、

「釈迦一代のその教えは一体、煮詰めてみたら、何でしょうか」

という。そしたら、雲門が答えて曰く、

「対一説」

と。これをいかに解釈するか、仏教の方でも問題になっている。

「二に對するの說」

と読むのか、

「対一の說」

と読むのか、

「二説に對する」

と読むのかわからない。しかしどのみち、ここに「一」という字があるのが非常に大切なことです。

この聖書一卷をちゃんと要を——要約というのはこの「かなめ」という意味です。扇の要という——なにことも、その要がつかめてなければ、いくら分析して総合したってくだびれるだけのものはなしです。

「二に對する」

と。私はどう読んでもいいと思いますけれども。お釈迦さんの説いているところは——説、その教えという意味では——その教説というものは、「二に對する」という角度にならなければならぬものである。結局、それは千變万化したことが教説にあるけれども、それは結局、「二に對して」いるんだと。

その一は一体何か。それは曰く言い難し。これを説明したって、その一なるものは——仏教の世界は悟りの世界ですから——キリスト教では神。はつきり一なる神、一神という。「父なる神は一つ」という。エペソ書にも書いてある。4章4節、

「⁴体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望をもて召されたる

が如し。⁵主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、⁶凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのもの



内に在^{いま}したもう。」(エペソ4:4～5)

この「一なる神」が万^{よろず}のものを貫き、万のもののの中にあり、万のものの上にあると。そういったエペソ書4章4節あたりにあるこの「一」。この「一」は即してまた「一」である。そういう要の「一」は、この「プニューマ」「パラクレートス」という、これが本当に我々の現実とならなければ、いくら

「信仰の、行為の」

なんていったって、

「聖書の研究」

といったって、始まらない。

●助主

ある旅人が喉が渴いた。そしたら、

「こちらへいらつしやい」

と言って連れて行ったら、そこに大きな池があつた。旅人は池を見て、

「ああ、とてもこれはたまらん。この池の水を飲みきれない」

と。喉が渴いているのに飲もうとしない。ちょうど、聖書やお経の世界が、千万の言葉があつて、この一巻の聖書を見て、

「こんな大変なものはとても読む気がしないからやめよう」

と、魂が渴いているのに、やめようとするのと同じことです。自分のポケットからコップを出して、自分の飲めるだけを飲めばよろしい。少ない水と大きな水は、量はちがうが質は同じ水である。同じ水ですから、コップの水だけを飲めばいいのに、池の水を見て驚いてしまつて、とても飲みきれないと言って、

「聖書なんて読みきれないから、やめよう」

と言うのと同じです。ヨハネ伝だけに食いつけばいい。ヨハネ伝の1章だけに食いつけばいい。マタイ伝の5章だけに食いつけばいい。5章3節、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

という、そういう水を飲めばいい。讃美歌217番に、

「天^{あま}つ真清水^{ましみず}飲^{のみ}むままに、渴^{あせ}きを知らぬ身となりぬ」

とある。あなた方、ああいうのを歌うときに、本当にその気になって歌ってますか。本当にその気になって、その瞬間に自分の魂を投じてなければいけません、すべて。生きた響きをもって皆さんがその讃美歌を歌わないと。この水を飲んだらもう渴かないという質の水。これが「天^{あま}つ真清水^{ましみず}」といわれているところの聖霊である。聖霊即ち御霊。ヨハネ伝14章16節に、

「¹⁶われ父に請^こわん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給



うべし。」

と。「他に助主」とあるものだから、キリストのことをやはり「パラクレートス」と言っただけらしい。キリストはパラクレートスであるが、

「もうひとつ別なパラクレートスを」

という。キリストもパラクレートスである。そのキリストが具体的に私たち一人ひとりにパラクレートスとなるには、それは聖霊によらなければならない。キリストは天界にただ一人ですから。それが無限の展開をする。そういう無限の展開をするためには、このパラクレートス、聖霊によらなければならない。そういう助け主。正直、私たちは何かにぶつかると――恋愛で暗礁に乗り上げてみたり、また学校の成績で暗礁に乗り上げてみたり、いろんなことが人生にはあるよ――そうすると、SOSだ。ペテロも水の上を歩きかかったのはよかったが、風を見て恐れたゆえに沈みかかった。だから、ペテロは、

「主よ、助けたまえ」

SOSでござると言った。それで、キリストは現実にはパラクレートスだから、捕まえてペテロを上げてやった。

私たちはこちらから呼び求める。呼び求められたるもの。我々の方からは呼び求める。別な意味でいうと、聖霊は神さまに対して我々に――さっき言った「執り成すもの」ですから――仲介者、中保者でもあるわけです。

「神―キリスト―聖霊―我」

と。神の本願を受けとつて、この人間の悲願を助けてくれる中間にあるわけです――何願というのか知らんけれども――「中願」なんていうわけです。そんな言葉はない。本願・悲願という。そういう呼び求められてあるところのもの、また呼び求められている実質を、それに応える実質を持つているから、我々に本当に助け手となるところのもの。あるいは、深く慰めを与えるところのもの。これがここにあるところの聖霊であるわけです。

●聖霊が来るから新しくなる

もう少し先の方をちよつと見てください。16章のところに、

「7されど、われ実を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主
なんじらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。8かれ來らんとし世をして
罪につき、義につき、審判につきて、過てるを認めしめん。」(ヨハネ16:7-8)

とある。どうしても、この聖霊ということが今のキリスト教に本ものとならなければ、いつまでたつてもダメなんです。もうはつきりこう言っておられる。

今、「願ひ」と言いましたが、結局、願ひは祈りです。祈りはまた、実は自分を投げ入れること。キリストの中に自分を投げ入れることが祈りである。自分を本当にキリストの中に投げ入れる。



マルチン・ルターは「神の言」ということを非常に言いましたけれども、また誤解され
ては困る。

「本当の信仰というものは神のわざである。しかも我々の中で。私たちを新しく生まれ
変わらせる。我々を神から新しく生まれさせる。」

キリストの甦りがまさにこの陰府よみから返る。いや実にその死の世界から新しい霊体として
甦れたんですから。

旧き我を殺してしまつて、我々を全く別な人間にしてしまつ。それは聖霊をそこに伴

つて、その心も、あらゆる力もみな新しいものにしてしまつ。」

と。いや実に聖霊が来るから新しくなるのであつて、信仰で新しくなつたと思うこともわ
るくはないけれども、それは思われた世界です。それが本当に新しくなるには、この聖霊
が来ないとダメです。

自分が実になつたと。しかし、変わらないところがあつたつていいんですよ、そんな
ものは。そこに聖霊という核が入ってきたら、これは霊的な霊核だから、霊核が新生命の
原動力ですから。そうしたらば、旧きものがいくらあつても、内側から新しくなつていく。
植物の葉は水を吸つてだんだん新しい葉が出てくる。それと同じことです。

呼び求めるとは何かというと、祈りですから。ただ呼んでいるのではない。呼び求めて
自分を投げ入れるような角度の呼び求めです。黙つていてもいい。黙つて沈黙の叫びをもつ
て、呼び求めていく。

●無の場

仏教の世界でも、親鸞はついに膨大な仏教の内容を結局、何という呼び求めに集約したか。

「南無阿弥陀仏」

この六字です。日蓮は、

「南無妙法蓮華経」

の七字。親鸞は六字の「南無阿弥陀仏」に、日蓮は「南無妙法蓮華経」に集約した。これ
が要かなめなんです。南無阿弥陀仏が要であり、南無妙法蓮華経が要である。この要を彼らはつ
かまえた。

私たちの要は、

「主イエス・キリスト」

です。「主イエス・キリスト」という要かなめ。「名により」というのがそのことです。

「わが名によりてこの助け主を」

とキリストがさつきのところと言つておられる。その名を呼ぶときに直ちにこの助け主は、
パラクレートスは、呼び求められてその中に入ってくる。聖名みなを呼ばれて入ってくるもの
が即ちパラクレートスなんだ。



だから、皆さん、ちつとも難しいことはないですよ。問題は自分を投げ出すこと。そして、一体その場はいずこであるか。禅宗の要は何かというと、無の一字です。不立文字、教外別伝とかいう。禅宗は無、「ニヒツ」。

無は即ち無限である。無という、無私というこの無の世界は十字架が与えている。十字架が与えてくださっていますから。この世の諸々の矛盾、不合理、一切を担って、黙ってこの十字架にキリストはかかった。この世の一切の矛盾、不合理を全部これを十字架にかけて、自分が背負ってしまいましたから。

だから、それをもう皆さんは、いま聞きながら、私と同じ心境に入ってくださいよ。私はなにか解説なんかをしているのではないから。聖書の解説なんか、そんなことやっているのではない。これを本当に受けとる。あるがまま、驚くべき世界に入る。この十字架という門を通って。この門を通って、十字架を通って直ちに。呼ばれている世界は十字架の門の下で呼んでいるんだから。あなた方は十字架の門の下で呼ばれている。至るところこれ十字架の門ですよ。いついかなるところでも、キリストを、神を呼ぶところは即ち十字架の門だから。そうしたらば、自分があるがままにして既にすつ飛ばされている。あるがままにして既にすつ飛ばされて、無私の世界に入れられているから、

「主よー」

と呼ぶところにはパラクレートスが入ってくる。そうしたらば、これは驚くべき生命であり、愛であり、光であり、知恵である。

「私が向こう側に十字架を通って行くまでは、お前たちはこれを呼んでも本当に呼べないんだ」

ということがそれなんです。

「私が向こう側に行かなければならないのは、今、私の真似をしろと言ったって、お前たちはダメなんだ」

と。自我に引つかかっている。しかし、

「自我に引つかかっても、十字架によつて私が無私となる」

という心境を一生懸命で悟ったって、そんな悟りではないですよ。すつ飛んでいるんだから。あるがまま、ダメのまんまでいいから、どうぞ、分裂のまんまで、その世界に入っていく。これを是非とも本ものにして――「ください」もヘツタクレもない――もうそうなってしまう。なんと今までのキリスト教は七面倒くさいことにしているのだろうか。

「私が行くのは本当に楽しいことである」

と。だから、

「この聖霊が入ってきたら、なんと信仰とは生き生きとして、働きかけ作用していくところの力強い事態であるか」

と、ルターさんも凱歌をあげて言っているわけです。だから、



「律法を満たす」

なんていうことも何でもない。

「自分を本当にキリストの中へと投げ入れた信仰によってこそ聖霊が来るし、聖霊が来てこそ、またそれが本当の信仰である」

ということ。

●聖霊をくぐりつ

そういうわけで、またもとへ戻ります。

26 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。

「思い出す」とはただ思い出すということではない。それは、

「思い出したら、もうそれが本当で、あなた方の本当の現実となるぞ」

ということです。

27 われ平安を汝らに遺す、

本当の安らぎ。「アイレーネ」という字ですが、本当の安らぎを汝らに遺す。

わが平安を汝らに与う。

「わが平安とは何だろうか」

と思つたらいかん。我というキリストが即ち平安である。キリストのいないところに平安なんてありはしない。また、平安の内容そのものがパラクレートスである。聖霊、助け主である。御霊が入つてまいりますと、もう何とも言えないところの平安と力と喜びが――「喜び」と言おうが何と言おうがいいですが――くる。

テトス書3章をちよつと開きましょう。5節あたりから、

「我らの行いし義の業にはよらず、唯その憐憫により、更生の洗いと我らの救主イエス・キリストをもて、豊かに注ぎたもう聖霊による維新にて我らを救い給えり。」(テトス3:5)

「憐憫により」ということと、「更生の洗い」ということと――これは聖霊のバプテスマのことです――

「豊かに注ぎたもう聖霊による」

ということとはみんな同じことです。これが恵みの内容です。「更生の洗い」という。御霊のバプテスマを受けると、私たちは本当に何か、

「ひと新たに生まれずば、ひと上より生まれずば」

とキリストに言われた事態が分かつてくる。そして、だからまた、

「豊かに注ぎたもう聖霊によるところの維新とで自分たちは救われた」

という。



「救われた」と言っただけ、

「キリストは贖罪なさった」とか、

「キリストは甦った」

とかというその事柄をいくら覚えても、信じたって、信じ込んだって、そんなものは救いにも何にもなりはしない。水は飲まなくてはいいかん。

「水はH₂Oである」

なんて言っただけダメです。それは学問の世界だ。そんなことはいいらん。水をとにかく、私みたいに飲まなくてはいいかん。それで私の喉は潤いました。そういうように、皆さんの魂も祈りの世界で御霊という水を飲む。

十字架の場におけるところの祈りの世界です。「十字架の場」と言いますが、甦りの活けるキリストが必ずそこに立っておられるわけです。活けるキリストがなくて十字架だけのキリストなんてありはしない。この十字架されたキリストは必ず甦りたもうたのですから。この甦りのキリストは、

「さあ、私を飲め、私をくらえ」

と言っておられる。最後の晩餐で言われた、「私を飲め、私を喰らえ」という言葉はみんな要は結局、

「聖霊を受けよ」

というのと同じことです。しかも、皆さんは、

「それじゃ、聖書はそちのけで、聖霊を受けよう」

なんて——それはいいですよ、そちのけでも——しかしながら、これはただそちのけではないんです。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストは言うんですから。私たちはこの聖書を読むときに、その言葉に——読みながらその文字の奥から響いてくるところのこの霊に——生命に触れる読み方をしなかったら、いくら読んだってダメだ。その代り、そういう読み方をしたら、ただ一か所を読んでも、即ち一杯の水を飲むのと同じように、御言をひとつ本當にくれば、直ちに聖霊をくらったことになる。聖句を読むことが聖霊をくらうことと同じことになる。

朝にでも——朝はまあみんな忙しいからなかなか困るけれども、しかし忙しくても少し早めに起きて、5分でもいいです——じつと落ち着いて読む。聖書の一か所でもいいですよ。決して私は規則として言うわけではない。朝ご飯を食べる前に霊的朝ご飯を食べなくてはいいかんわけです。また、夜ねむる前に霊的な糧をくらって眠れば——不眠なんてことはない——必ず眠れる。聖書は、そういう意味で読まないではいられない。

「聖書を読んだら、私はもう何だか知らないけれども、力が満ちてしまったから」と、聖書を、御言をくらったら。



「今日は少しお金が足りない。よし、聖書をくらって、お昼は抜きにしよう」
と。やってごらん、学生諸君は。そうしたら、ご飯を食べて、午後の時間眠くなるよりか
よっぽどいいから。とにかく、それくらいの気合で生きなくては。そうしたらば、

「ああ、何とまあこれは自由自在なことになったことだろう」と。

「これだけカロリーをとらなければ健康上どうである」

なんて、計算されたようなことではない。二つの魚と五つのパンから五千人を喰らわせた
キリストの霊的な糧というものはもの凄いのを持つている。

このガイスト(霊)の世界は、魂の生命の世界は量り知れないから。御霊は与えて限りな
しという世界です。「これでいい」なんていうところはひとつもない。もう私なんかはまだ
まだというわけです。それだけ私も常に求めてやまず、与えられるから求めてやまず
という。与えられるからこれでいいなんていうのではない。昔の坊さんたちはみな仏の世
界でそういうものを知っていたから、ああいう実存が展開した。いわんや、キリストの霊
をいただいている者はなおのこと。なんだか今のキリスト教は、クリスチャンというのは
全くだらしのないよな。一面、ばかにかたっ苦しくてね、なんだかゴチゴチしてみたり、あ
るいはなんか寝ぼけてみたり。

●「如一説」

キリストは安んじて行かれた。だから、

「やがて聖霊が来たらば、お前たちは、何がきても動かないところの、ダルマみた
いに必ず起き上がるところの、本当の平安を得る。この聖霊を受けないで、なん
の平安か」

と。なにかしらんけれども、皆さんはこれを聞いているうちに、だいぶ楽になったと思ひ
ますがね。私たちの集会がそのようにして毎回前進して進んで行きながら、特に夏の山
中の集会でもの凄く祈りの中に入れば、みんな驚くべきことが生ずるでしょう。なにも夏
を待つ必要はない。今、毎回それでいい。

「万よろずのこと時あり」

なんていう言葉もあるように、どうぞ、そういう大事な時は特に逃さないように。「その時
を逃してまた千載せんざいその時あらんや」というようなわけです。だから、

「心を騒おそがすな、懼おそるな」

とあつたら、

「はい、心は騒ぎません、懼れません」

と、そう読まなければダメだよ。

「心を騒がすな、懼るな」

「さあ、どうも、どこまで本当にできるでしょうか」



なんて、そんな読み方をしたらダメです。

「汝ら、心を騒がすな、懼るな」

「はい、心も騒ぎません、懼れもしません」

と。皆さんはこういう読み方が自然にできているわけです。

だから、聖書はもう楽しくてしょうがない。まあ、人生は滑ったり転んだりいろんなことがありますが、決して気落ちしてはいかん。すべてのことが働きて善となる。最善となる。

「最悪のことも勇敢なる者には最善となる」

という。「勇敢なる者」というのはこのパラクレートスを持った人が本当の勇敢なるものになる。それは絶対に最善となります。そのかわり、これなくして「信仰、信仰」なんていくら力^{りき}んでみたって、それはくたびれるだけののはなし。

大胆に行かなくてはいかんですよ、大胆率直に。右顧左眄することはないですから。大胆率直に自分を投げ入れれば入れるほど、その呼び求められたるものは、

「いや実に、お前の呼び求め以上に私はお前を呼びもとめているんだ。私はお前を

呼びもとめて、さあ来なさいと言っている」

と。パラクレートスは実は、呼び求める者と今度は逆に能動的に私たちに働きかけてくれるところの霊です。

これはいつも対する姿です。今度は、「対一」ではなかった——あの坊さんは、雲門はどういう気持で言ったのかな——私に言わせれば、「如一」の説、「如一説」、一如です。一なるが如き、要するに、即一、即如。一に即し即如。即一即如の世界がピタリ、この聖霊をうちに宿している世界です。これが本当の砕^{くだ}けであり、本当の無^むです。

「まだ私は砕けていません。まだ私は無ではありません」

なんてもし言ったら間違いですよ、皆さん。私は砕けていませんよ。私は無でもありません。という絶対^{ぜったい}、恩寵^{おんこう}の事態がこの世界です。

この大宇宙を一としてグッと見る。ゲートなんていうやつはだいたいぶそういう角度があった。この雑多なものの中にある一つのをグッと見る。路傍の石において宇宙の秘密を見るというような見方、つかまえ方。これはみんな要^{かなめ}の世界です。要を持った魂となる。そうしたら、聖書のどこを読もうが、どれくらいな頁数^{ぺいすう}があろうが、ひとつも恐れることはない。これをつかまえたら、皆さんはもうこれから——これから何年あるかしらんけれども——もうそれは人生さまざまなことを、滑ったり転んだりを通して、体験すればするほど力が出てくる。いよいよ力が出てくる。そうして、そのような力を、そのような本当の光を、そのような本当の生命を人びとに分かたずしては止まないような人になっていく。それが本当の証^{あかし}ということですよ。

